
魅惑の嫁入り道具

コーヨ ケイコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅惑の嫁入り道具

【Nコード】

N0629R

【作者名】

コーヨ ケイコ

【あらすじ】

結婚式前日、母から渡された「それ」は世にも奇妙な嫁入り道具だった。

母から娘へ受け継がれる、ちょっと危険で魅惑的な家庭円満の秘訣とは……？

（前書き）

少し不思議（SF）の作品に分類されたいと思います。
ちゃんと落ちがあります。

「いよいよ明日ね」

式の前夜、母が私の部屋に訪ねてきてしみじみとそういった。

「…うん」

「お父さんはああ言ってたけど、戻って来るんじゃないわよ」

「…うん」

母は笑って言ったが私は一緒に笑えなかった。二十五年も過ごしてきたこの家を

離れるなど私の想像外だ。家族と毎日顔を会わすこともなくなる。私の立場も娘から妻になる。

—私は、もうこの家族の一員ではなくなるのか。

そう思うと急に悲しく思えてきた。明日から始まる生活は、全く新しい未知のものだ。それがたとえ好きな人とであっても不安な気持ち拭えない。

「何そんな辛気臭い顔してんの。明日は詩乃にとって記念すべき日になるのに」

母はどんな時でも明るく優しい。

「母さんはね、あんたが幸せになってくれることが一番嬉しいの。ほんとよ。だから精一杯がんばって、いい家庭を作りなさい」

目頭が熱くなつてしまい、不覚にも泣いてしまった。

ああ…私はこんなにも不安で一杯だったのか。自信がなくて、誰かにそういつて欲しかったのだ。

「やあね、おめでたいことなのに。ほら、泣かないで」

母は軽く私の背中を叩くと、

「一母さんもね、お嫁に行くときはなんだか寂しい、不安な気持ちになったの。」

今の詩乃と同じね」

肩をすくめて笑ってみせた。私は幼い動作で目頭を擦る。

「そしたら結婚式の前日に母さんのお母さん、つまりお祖母ちゃんがね今の母さん

みたいに訪ねてきたの」

「へえ……」

昔の話をする母さんが珍しく、私は心から聞き入っていた。涙はほとんど乾いて少しだけ頼がつっぱった。

「……そうしてこれをくれた。母さんの唯一の嫁入り遺具よ」

そういつて母は一つの見たこともない小瓶を私に手渡した。美しい曲線を播く透

明なガラスの瓶に薄紫色の液体が入っている。アールヌーヴォー調のクリスタルと紫色は妖艶な雰囲気醸しだし、一見それは高級ブランドの香水か何かのように見えた。

「これ、なに？」

私は薄紫色の液体を指さして聞いた。瓶の蓋を開け鼻を近づけてみたが、特に何も匂わない。母はくっくつと笑った。

「何も匂いやしないわよ。それはね、詩乃。家庭円満のための魔法の薬なの」

「……なに、それ」

私は困惑した。一魔法の薬？家庭円満のための？

日頃、母はこういう冗談を言うタイプではないので私は大いに面食らった。確かにうちの家庭は夫婦とも仲睦まじく、ご近所からも羨ましがられるほどの円満家

庭だったがそれとこの薬が関係あるようにはとても見えない。

母は私の手のなかにある小瓶を懐かしげにみつめて唐突にいった。

「ねえ、詩乃。いい家庭を維持し続ける条件って何だと思う？」

そんな条件なんてあるのだろうか。「いい家庭」の模範の様な環境で育った私には考えてみたこともない。母は続けた。

「それは寛大な母親よ。夫の小さな浮気も、子供のささやかな反抗も全てを許し受け入れられる大きな器なの。母親が些細なことで感情的になったり、家の中で神経を尖らせていては自然、家庭のなかもピリピリとした雰囲気になってしまうわ」

なるほど。そうかもしれない。母はいつも鷹揚で終始おつとりと微笑んでいるイメージがある。私は母親が激怒したりヒステリーを起こしたことがないことに今更ながら気がついた。

「いい？一家の大黒柱は父親でも家庭の中心は母親なの。良妻賢母とは男親を立てながらも全ての采配をして家庭を潤滑に運営する手腕を持った女性のことなのよ。どちらにしろ菩薩のような寛大さが最も重要な。そしてその瓶の中身は私にそれを可能にしてくれたわ」

そういつて母は私を見つめた。

「驚かないでね。詩乃、それは毒薬なのよ。致死量が一ミリグラムで死体から薬が検出されないという我が家秘伝の劇薬なの」

「うそ！」

思わず瓶を取り落としそうになった私の手を母が慌てて抑える。

「しっかり持っててちょうだい。危ないわねえ」

「マジなの、母さん？だったら危ないのはこっちの薬の方よ！」

私は声を荒らげた。そんな危険な毒薬を結婚式前日の娘に手渡さないで欲しい。私はその神経に呆れ返った。冗談にも程があるとはこのことだ。

「第一これをどう使えば家庭円満の薬になるっていうの？」

「あら。誰も使うなんていつてないわよ」

「でも、さつき…」

「ちょっとは落ちつきなさい。気の早い子ね。だいじょうぶ、母さんだって使ったことなんかないわ。これは使わないことに意味があるの」

使わないことに意味があるとはどう言うことだろう。いやいや、使ったことがあるとしたらそれはそれで大問題だが。

「要は心の問題なのよね」

どこか達観した口調で母は言った。

「寛大な人間には心に余裕がある。心の余裕、それが寛大さに繋がると思ふの。いえ、実際母さんがそうだった。心に余裕がもたらされたからこそ皆に優しく、落ちついて接することが出来たんだと思う。母さんの心の余裕の源はこの薬だったのよ」

「は、はあ…」

「この薬を持つことでみんなより一枚上手の様な気になったの。ど

んなに憤ろしいことがあっても『私にはこれがある、いざとなったら食事に混ぜてやる切り札があるのよ』って」

私はサツと血の気が引く音が聞こえたような気がした。胸に常に毒薬を秘め、溜飲を下げる母の姿はぞつとしない。否、想像さえしたことがなかった。断じて私の母のイメージではない。

幸い母は私の心中を察したのか、すぐに「別に本気じゃないわよ。極端に言えばの話」と付け加えたので内心私は胸をなで下ろしたのだが。

「そう思うとだんだん冷静になってきてね、そんな小さなことで目くじらを立てる自分が小物に見えてきたの。私にはこの薬というものがあるんだからもつと寛大にならなくっちゃっ、ってね」

「そ、そんなもんなの!？」

この年になって母の新たな一面を知ってしまい、私はしどろもどろに尋ねる。対する母はあっけらかんとしたものだった。

「そんなもんよ。どっかの国の核兵器とおなじね。焦る必要も苛々する必要も、この薬のおかげで私にはなかったわ」

言葉が見つからなかった。そんなものかと思えばそんなものだし、非常識といえはこの上なく非常識である。第一代々の嫁入り道具が毒薬だという時点で興に常識から逸脱している。だが代々伝わるということはこの薬に伝えるだけの価値があるということではないだろうか。我が家の女にしか存在の知られていない秘伝の毒薬。

この珍奇な嫁入り道具は家庭円満という何物にも代えられない魅惑

的な性質を帯びているのだ。

母はこの薬の存在のおかげで幸せな家庭を築くことが出来たと言っていた。

だったら私の場合はどうなのだろう？

「これは私にはもう必要ない物。だから詩乃に譲るわ。これから必要になるのは詩乃の方じゃない？」

私は日本語を習いはじめたばかりの外国人のようにたどたどしく聞いた。

「……必要になると思う？母さんのように」

「さあ、どうかしら。詩乃次第ね。ただ私が言えるのは??」

私は母を、そして毒薬を見つめた。

「お祖母さんも家庭円満だったってことぐらいね」

こうして私は薬を譲り受けました。始めのころは瓶を見ては困惑することがままありましたが、一今ではあるのが当たり前前の存在となつて私の側に置いてあります。

今は良い家庭を持って幸せに暮らしていますが、薬が必要になることがやはり何度かありました。あるとなしでは大きく心の有り様が変わることも分かりました。今では母や祖母がこの預を代々伝えた

気持ちが多少なりとも分かるつもりです。ある意味、とても優れた働きをする薬なのだと実感しました。

私の娘ももう年頃です。娘が嫁入りの際には、おそらく私も中身を一滴も使わないままこの遮を譲り渡すことでしょう。

しかし私には一つどうしても気になることがあります。

それは瓶の中身です。もちろん紫の液体が入っています。母からは毒薬と伝えられましたが、しかしそれは本当なのでしょうか？私もこの年になり娘に渡すことを考えて始めて気づきました。形だけのものとはいえ、実の娘に家族を害するための薬など渡す母親がどこにいるのでしょうか？少なくとも私だったら渡さないでしょう。第一薬晶反応の出ない劇薬などあるのでしょうか？あつたとしても昔のこと、どうやって手に入れたのか、我が家が薬師だったなどは聞いたこともありません。

母は五年前に他界してしまいました。そして、そのとき私は瓶の中身が紫色に着色しただけの、ただの色水ではないかと、ふと思い至ったのです。

今となっては本当のことは分かりません。

しかし……最近はそのことなのだろうと、ただそう思っているのです。

（後書き）

こついった傾向の作品がどのくらい好まれるのか知りたいと思っています。

またちゃんと文章が書けているか、表現が伝わっているかが気になると思っています。

最後の落ちについても、もっとひねった方が良かったでしょうか？
全体的にもう少し質を上げていききたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0629r/>

魅惑の嫁入り道具

2011年10月8日19時11分発行